

# “古典的ルヴァロワ”石核と“円盤形”石核

## 復元製作に基づく問題提起

大沼 克彦\*

### はじめに

周知の如く，“古典的ルヴァロワ”石核（図1）は，極めて頻繁に，“円盤形”石核（図2）と共伴する。

“古典的ルヴァロワ”石核，特にその典型例は，打面として特別に準備された部分を持ち，三角形状且つ非対称のタテ断面を持っている。それ故，特別に準備された打面部を持たずその断面が両凸形とされる典型的“円盤形”石核とは異なるだろう。

とはいえ，これらの石核を断面形で区別することは至難な業である。両石核の断面形には，少なからず，中間乃至移行形が見られるからである。

F. Bordes は大著 *Typologie du Paléolithique ancien et moyen* [1961] に於いてルヴァロワ剥離方式を定義した。即ち，ルヴァロワ剥片類を“それらが石核から剥離される前にその形を石核上の特殊な調整で予め定められるもの”と規定し [1961: 14]，三型式に分類した。背面上に平行，或いは求心的な調整剥離痕を持つルヴァロワ剥片，最大長が最大幅の2倍以上ある縦長ルヴァロワ剥片としてのルヴァロワ石刃，そして，ルヴァロワ剥片や石刃用の石核とは異なる特殊な石核から剥離されるルヴァロワ・ポイントの三者である [1961: 17-18]。

後に Bordes は，求心的調整剥離痕を持つルヴァロワ剥片と石刃を“古典的ルヴァロワ” (*type classique*) と規

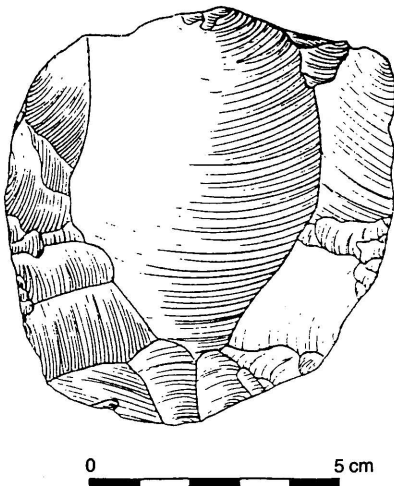


図1 “古典的ルヴァロワ”石核  
フランス，Montguillain 遺跡出土 [Bordes 1961: Pl. 100-1]

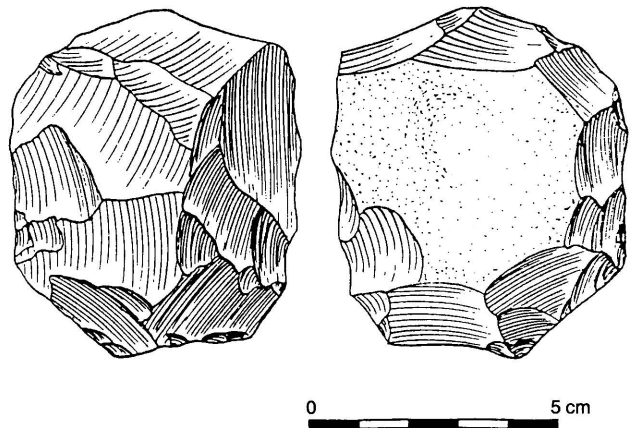


図2 “円盤形”石核  
フランス，Combe-Grenal 遺跡出土 [Bordes 1961: Pl. 106-5]

\* 国士舘大学イラク古代文化研究所

定している〔1980：45〕。

今日、E. Boëda はルヴァロワ剥離をその概念 (*concept Levallois*)、方式 (*méthode Levallois*)、技法 (*technique Levallois*) という三視点で説明する。以下はそれらの要約である〔1988a；1988b；1991〕。

概念：ルヴァロワ剥離概念は、石核の一面だけが剥離作業面で他面は打面用のみに利用される片面剥離の概念である。ルヴァロワ剥片は、常に、この二面の交差面と平行しながら剥離され、その剥離回数は、剥離作業面と交差面のあいだの容積に規定される。方式：ルヴァロワ剥離方式は二分される。その一は単一剥離方式 (*méthode linéale*) と呼ばれ、単一のルヴァロワ剥片、ポイント、或いはポイント状縦長剥片が剥離される方式である。ここでいわれている単一剥離とは、剥離作業面調整が終了する度にルヴァロワ剥片が一つだけ剥離されることである。それ故、剥離作業面と交差面間の容積に余裕がある場合には、剥離作業面の再調整が繰り返され、その都度ルヴァロワ剥片が剥離されることになる。剥離方式その二は複数剥離方式 (*méthode récurrente*) と呼ばれている。複数のルヴァロワ剥片、石刃、或いはポイントが連続剥離される方式である。即ち、剥離作業面の調整、或いは再調整が終了する度に一連のルヴァロワ剥片類が複数剥離される方式である。複数剥離方式は、剥離方向から、一方向複数剥離方式 (*méthode récurrente unipolaire*)、相対二方向複数剥離方式 (*méthode récurrente bipolaire*)、求心方向複数剥離方式 (*méthode récurrente centripète*) の三者に分類されている。技法：剥離技法とは、剥離方式で用いられる動作と剥離具のことである。即ち、石ハンマー使用の直接打撃のことである。

ところで、“円盤形”石核 (*nucléus discoïde*) は、その異なる剥離方式に着眼した Bordes によって二分されている〔1961〕。

その第一の剥離方式は、表面をルヴァロワ状に調整された石核から単一のルヴァロワ剥片を剥離する代わりに、求心方向にスード・ルヴァロワ・ポイントを含む剥片を連続剥離して石核を放棄するものである。この場合、剥離が石核の表裏両面に及ぶこともある。第二の方式は、ルヴァロワ剥片を剥離されたルヴァロワ石核が放棄されず、そのまま続けて、第一方式と同様な方法で連続剥離されるものである〔1961：16，72-73〕。

この Bordes による“円盤形”石核の一つ、即ち、ルヴァロワ剥片を剥離されたルヴァロワ石核が放棄されずそのまま“円盤形”石核に転用されたものは、Boëda の謂う求心方向複数剥離方式 (*méthode récurrente centripète*) のルヴァロワ石核〔1988a：Fig. 7〕と区別することが困難である。

Boëda は、最近、次の諸点で“円盤形”石核とルヴァロワ石核を区別している。1) “円盤形”石核に於いては、石核調整が終了していったん“真正”剥片の剥離作業が開始された後には、剥離作業面の再調整が施されない。2) “円盤形”石核は、その上下両面が剥離作業面、打面設定面という機能を交互に果し、上下両面間に区別のない両面剥離である。一方、ルヴァロワ石核は、上下二面間にそれぞれ剥離作業面と打面設定面という機能的区別があり、この意味で、片面剥離である。3) “円盤形”石核は特別に準備された打面部を持たず、両凸の断面を持っている。一方、ルヴァロワ石核は特別に準備された打面部を持ち、ほぼブラノ・コンベックスのヨコ断面並びに三角形状且つ非対称のタテ断面を持っている。4) “円盤形”石核の剥離作業は、石核上下二面の交差面を切りながら両面にまたがっておこなわれる。一方、ルヴァロワ石核の剥離は常に交差面に平行して遂行される〔1991：Fig. 4〕(図3)。

Bordes は、既に1953年時点で、ルヴァロワ石核と“円盤形”石核がもともと技術的には同一で、異なる遺跡立地に由来する石器素材原石獲得の容易性、或いは困難性を反映したものにすぎないと述べている。即ち、付近に素材原石が豊富に存在したムステリアン時代の開地遺跡に於いては、後続剥離が可能なルヴァロワ石核が贅沢

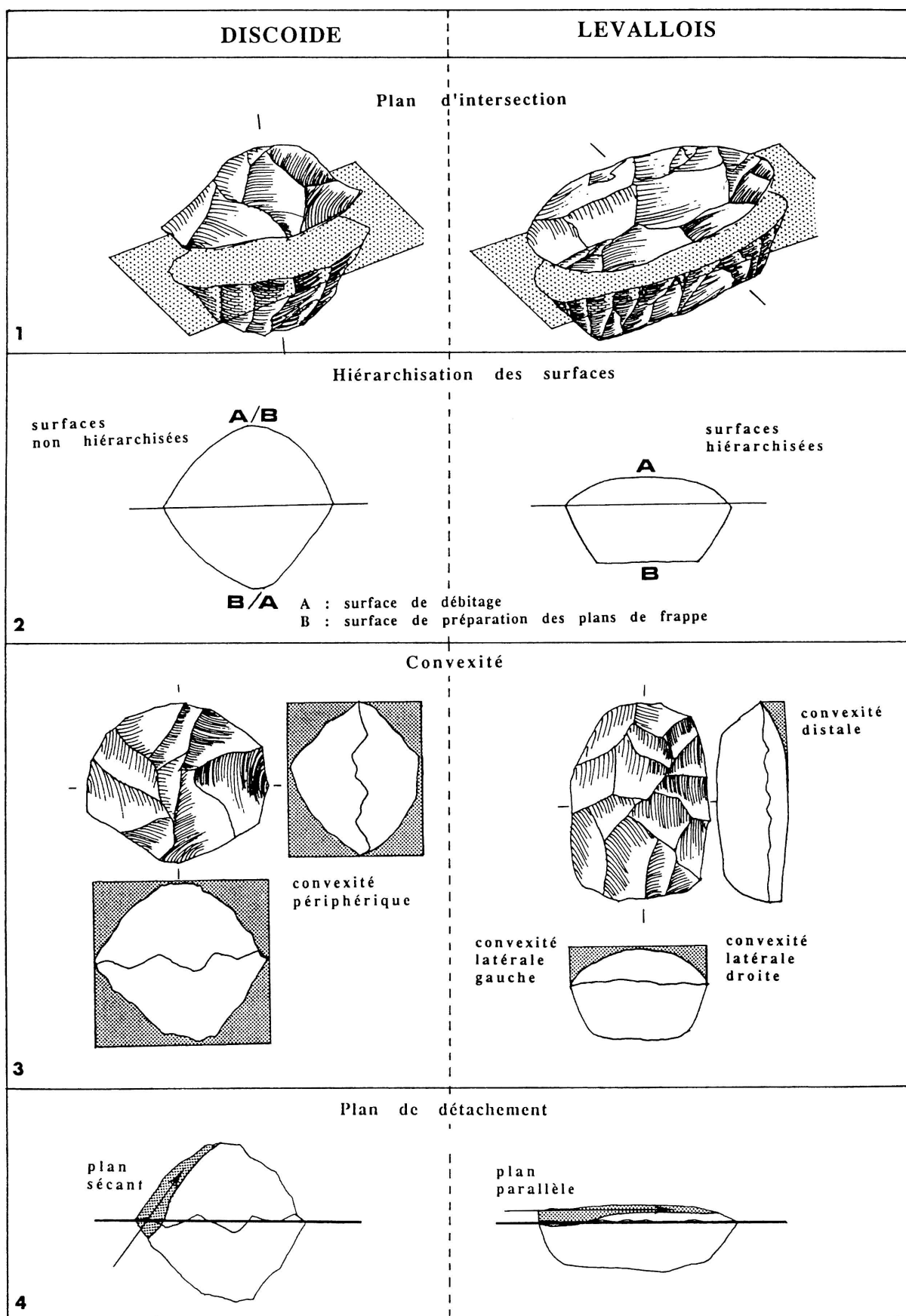


図3 “円盤形” 石核（左）とルヴァロワ石核（右）の相違点

1 石核二面の交差面 2 石核二面の機能 3 石核の断面形 4 剥離作業のあり方 [Boëda 1991 : Fig. 4]

に放棄され、一方、原石に乏しい同時代の洞穴・岩陰遺跡では、石核は原石豊富な他所から搬入され、最大限剥離され、その結果、“円盤形”を呈しながら放棄されたと述べているのである〔232-233〕。

この記述は、“同一技術の異環境下での異表現”という興味深い研究課題を提起している。これら二種石核の同定は、単に異種石核型式の認定という作業枠内にとどまるものではなく、それ以上に、ムスティエ期の生活総体における石器技術の表現変異という事柄にかかわるのである。

オーストラリア大陸における“古典的ルヴァロワ”石核、或いは“円盤形”石核の機能に関する興味深い民族誌的報告がある。

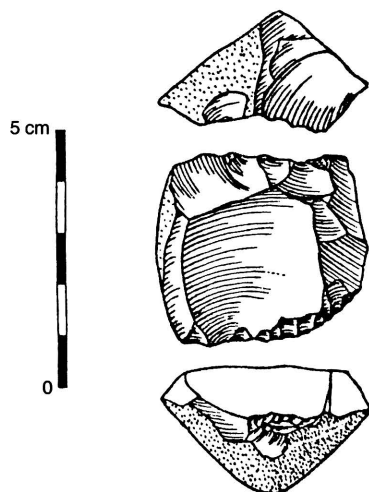


図4 オーストラリア西部・Kimberley 地区・Ord 谷出土のルヴァロワ剥片石核〔Dortch and Bordes 1977 : Fig. 5-19〕

C. Dortch と Bordes は、オーストラリア西部 Kimberley 地区の Unambal 族の一員 Wattie Karawarra 氏が欧州人の当地到来以後に年代づけられる Ord 谷出土ルヴァロワ剥片石核(図4)の機能を理解し、その剥離方を説明したことを報告している。

Wattie Karawarra 氏は、Dortch が示したチャート製石器を先ず石核と同定し、“その中から良い石(主要剥片)を取る”ために“誰かが”“これら小石片”(剥離作業面周縁部の調整剥離痕：Dortch と Bordes による註)“を剥がした”と述べ、その主要剥離面を下に向けながら石核を持ち、最終打面を自分の体の方に向けながら、如何にしてハンマー・ストーンの一打が主要剥片を剥離したかを身振りで説明したという〔Dortch and Bordes 1977 : 16〕。

Wattie Karawarra 氏の理解は、石の中には鋭利な刃を持つ良い剥片があるが、それを得るためには、先ず石の原皮を除去しなければならないということだろう。このことは、まさに、“古典的ルヴァロワ”

石核調整、或いは求心方向の石核表面調整そのものである。原皮が除去され且つ全周に鋭利な辺縁を持ち、使用に際して二次加工を必要としない剥片を石核上で準備するためには、“古典的ルヴァロワ”様の石核調整が最適と思われるからである。

かくして、この民族誌は“古典的ルヴァロワ”石核が出現した一つの背景を暗示している。

以上、“古典的ルヴァロワ”剥離と“円盤形”石核剥離にかかわる研究史の一端を述べてきた。

筆者は、以前、“古典的ルヴァロワ”石核を復元剥離し、“古典的ルヴァロワ”剥片とその石核調整剥片の形態・型式的、及び測定値の特徴を報告し、“古典的ルヴァロワ”石核と“円盤形”石核のあいだに明確な一線を引くことの難しさを指摘した〔Ohnuma 1990 ; 大沼 1991〕。

その後、筆者は“円盤形”石核を復元剥離し、“古典的ルヴァロワ”剥離と“円盤形”石核剥離を識別するための基準を探索した。“円盤形”石核の復元剥離にあたっては、Bordes の図式、即ち、表面をルヴァロワ状に調整された石核の、片面だけの、求心方向連続剥離〔1961 : 16, 72-73〕に従った。

以下は、これら二種石核復元剥離の概要、及び、そこで生じた剥離物にかかわる分析結果である。

### 復元剥離の概要と分析方法

“古典的ルヴァロワ”石核と“円盤形”石核それぞれ5回ずつの復元剥離で使用した石材は、山形県寒河江市月



布町の月布川河岸で採集した珪質頁岩塊である。これら頁岩塊は、淡茶褐色から濃茶褐色という色の変異を示し、概してきめが細かく、良質である。

復元剥離に於いては3個のハンマー・ストーンを使用した。石塊の粗割り、及び、ルヴァロワ剥離の石核素材用大形剥片の剥離に使用し、最も大形且つ930グラムの玄武岩製ハンマー、石核調整、ルヴァロワ剥片剥離、及び“円盤形”石核からの“真正”剥片剥離に用いた290グラムの玄武岩製ハンマー、そして、石核表面と側面の微調整、石核打面の細剥離調整 (faceting) に使用した最も小形且つ120グラムのチャート質素材ハンマーである。

採用した剥離方法は、左手で石塊を地面上に固定しながら右手で大形ハンマーを振りおろした石塊粗割りと石核素材用大形剥片剥離を除き、通常の直接打撃である。

“古典的ルヴァロワ”剥離は、石核側面、表面いずれかの調整をもって開始され、満足できるルヴァロワ剥片を剥離した時点で、たとえ石核再調整による再剥離が可能な場合でも、終了した。

“円盤形”石核剥離もまた、石核側面、表面いずれかの調整で開始された。石核打面と剥離作業面がつくる打面角が狭すぎたり、或いは、石核自体が薄くなりすぎて打面の再生が不可能となった時点で剥離作業を終了した。

復元“円盤形”石核5例の放棄時点の剥離作業面の様相は、入念に調整されながら未剥離の“古典的ルヴァロワ”石核のそれに酷似した。しかしながら、これらのうち1例だけが“古典的ルヴァロワ”石核に転用されるのに十分な厚さを有していた。“円盤形”石核から剥離された(筆者による)“真正”剥片は、それが予定したよりも大形に剥がれてしまったときには、その背面上に求心的剥離痕を持ち、“古典的ルヴァロワ”剥片に酷似した。

二種石核復元剥離各々に由来した二グループの剥片は以下の属性で分析され、グループ毎の分析結果は相互に比較考察された。

1. 打面特徴 [Bordes 1947 : 7-8 ; 1961 : 5] : 1) 岩石原皮面 (cortex), 2) 一枚の剥離面 (plain), 3) 山形をなす二枚の剥離面 (convex dihedral faceted), 4) 直線形複数細剥離面 (straight multiple faceted), 5) 凸形複数細剥離面 (convex multiple faceted), 6) シャポー・ド・ジャンダルメ型 (in *chapeau de gendarme*), 7) 破損面 (broken)
2. 打面最大幅
3. 打点直上の打面最大厚 [Wilmsen 1968 : 984]
4. 剥片最大長 : 打点から最終剥離点までの長さ [Jelinek 1975 : 304]
5. 剥片最大幅 : 最大長と直交する最大幅 [Bordes 1961 : 6]
6. 剥片最大厚 : 打瘤部以外の長軸上最大厚 [Munday 1976 : 121]
7. 背面上剥離痕型式 (図5) : 1) 一方向型 (unidirectional) [Bordes and Crabtree 1969 : 2-3], 2) 相対二方向型 (bidirectional opposed) [Bordes and Crabtree 1969 : 2-3], 3) 交差型 (crossed) [Tixier 1963 : 43], 4) 求心方向型 (centripetal) [Crew 1975 : 429], 5) 単一剥離痕
8. 背面上剥離痕数
9. 剥片輪郭形態 [Marks 1976 : 372] : 1) 平行型 (parallel), 2) 収斂型 (converging), 3) 拡張型 (expanding)
10. 剥片先端部形態 [Marks 1976 : 372] : 1) 非尖頭型 (blunt), 2) 尖頭型 (pointed)
11. 剥片タテ断面形 [Marks 1976 : 372-373] : 1) 水平型 (flat), 2) 内曲型 (incurvate), 3) ねじれ型 (twisted)

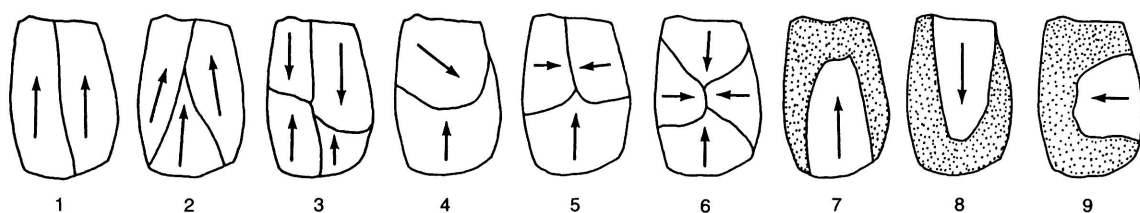


図5 剥片背面上剥離痕の型式

1～2 一方向型 3 相対二方向型 4～5 交差型 6 求心方向型 7～9 単一剥離痕

## 主要な分析結果

### “古典的ルヴァロワ”剥離にかかわる分析結果

5回の“古典的ルヴァロワ”復元剥離に由来した剥離物は都合235点である。その内訳は、石核側面調整剥片(74点), 石核表面調整剥片(図6-1, -3, -6)(127点), 石核側面再調整剥片(3点), 石核表面再調整剥片(図6-2, -5)(20点), 及び, ルヴァロワ剥片(図6-4, -7)(6点: 失敗剥離物1点を含む)である。

ルヴァロワ剥片の失敗剥離後に剥離された石核表面再調整剥片は, “円盤形”石核剥離で石核表面調整後に剥離された“真正”剥片と, 形態上, 類似した。そして, 非ルヴァロワ剥片(11点), 交差剥離痕を持つ偶発ルヴァロワ剥片(5点), 求心剥離痕を持つ偶発ルヴァロワ剥片(3点)の三者に分類された。

偶発ルヴァロワ剥片(図6-1～-2, -5)と石刃(図6-3)は都合18点あり, 剥離物全体の7.7%を占めている。

石核表面調整剥片の打面は, 一枚の剥離面(以下, 平坦打面とする)(44点), 或いは山形をなす二枚の剥離面(以下, 山形打面とする)(25点)である。石核表面再調整剥片の打面は, 山形打面(8点), 或いは凸形複数細剥離面(以下, 凸形調整打面とする)(5点)である。3点のルヴァロワ剥片は凸形調整打面を持ち, 残り3点は破損打面である。

石核表面調整剥片の背面上剥離痕は交差型(72点)が最も多く, 単一剥離痕がそれに次ぐ(25点)。石核表面再調整剥片の背面上剥離痕は交差型(14点), 或いは求心型(4点)である。6点のルヴァロワ剥片はすべて求心型の背面上剥離痕を持ち, 石核表面再調整に由来した偶発ルヴァロワ剥片と石刃の背面上剥離痕は交差型(5点), 或いは求心型(3点)である。

石核表面調整剥片の背面上剥離痕数の平均は3.7(分析資料: 127点), 石核表面再調整剥片に関する平均は4.6(分析資料: 20点)である。

### “円盤形”石核剥離にかかわる分析結果

5回の“円盤形”石核復元剥離に由来した剥離物は都合259点である。その内訳は, 石核側面調整剥片(50点), 石核表面調整剥片(83点), 及び, “真正”剥片(図7-1～-10)(126点)である。

“真正”剥片は, 非ルヴァロワ剥片(64点), 交差剥離痕を持つ偶発ルヴァロワ剥片(34点)と石刃(10点), 求心剥離痕を持つ偶発ルヴァロワ剥片(7点), 典型的スード・ルヴァロワ・ポイント(図7-2～-4)(10点), 及び, 非ルヴァロワ石刃(1点)に分類される。ここで非ルヴァロワ剥片とされているものの多くは, 非典型的スード・ルヴァロワ・ポイントと呼ぶことのできるものである。

偶発ルヴァロワ剥片(図7-1, -5～-7, -9～-10)と石刃(図7-8)は都合54点あり, 剥離物全体の20.8%を占めている。

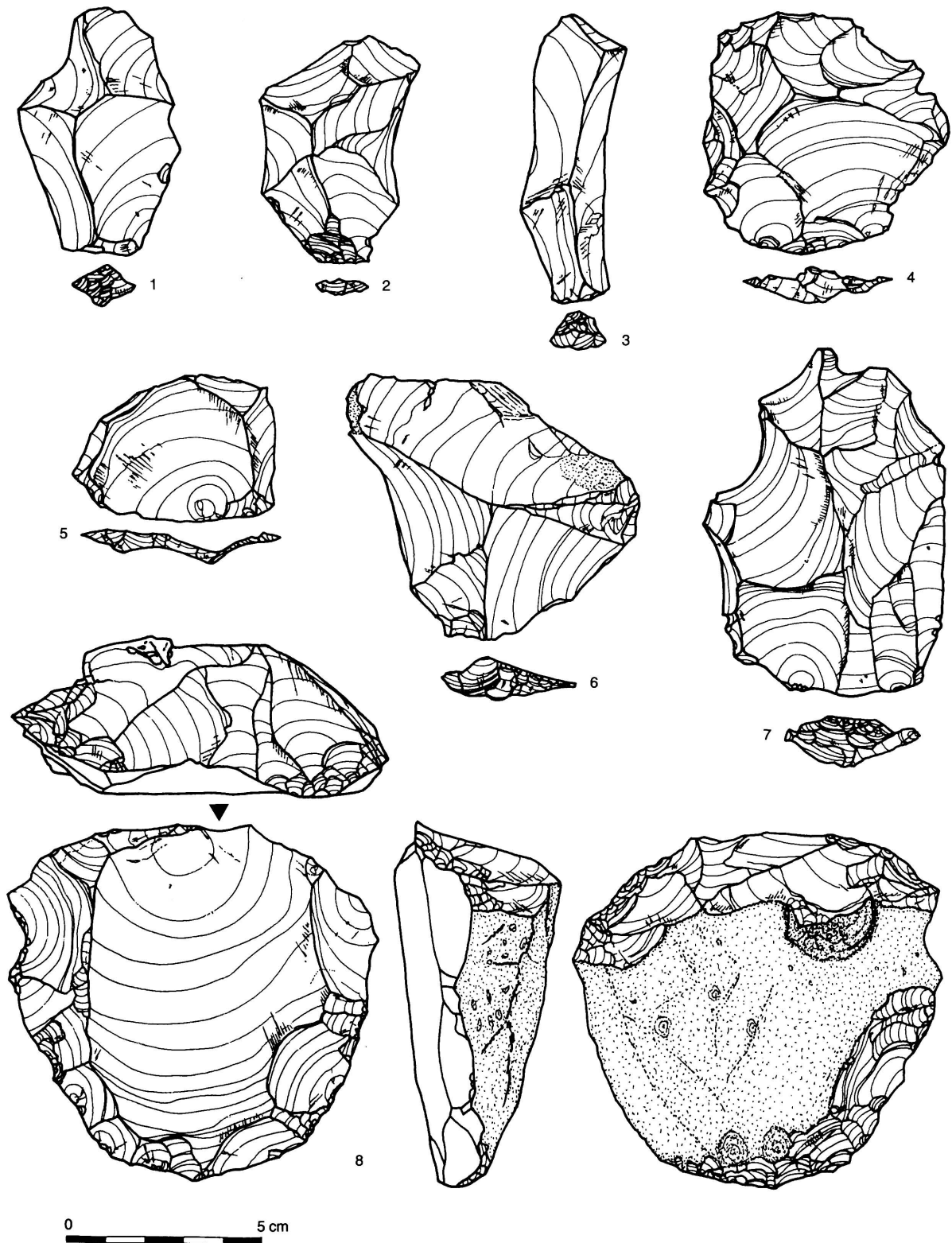


図6 “古典的ルヴァロワ” 復元剥離による剥片と残核

1～2, 5 偶発ルヴァロワ剥片 3 偶発ルヴァロワ石刃 4, 7 “古典的ルヴァロワ” 剥片 6 典型的  
スード・ルヴァロワ・ポイント 8 残核 (1, 3, 6 石核表面調整剥片 2, 5 石核表面再調整剥片)

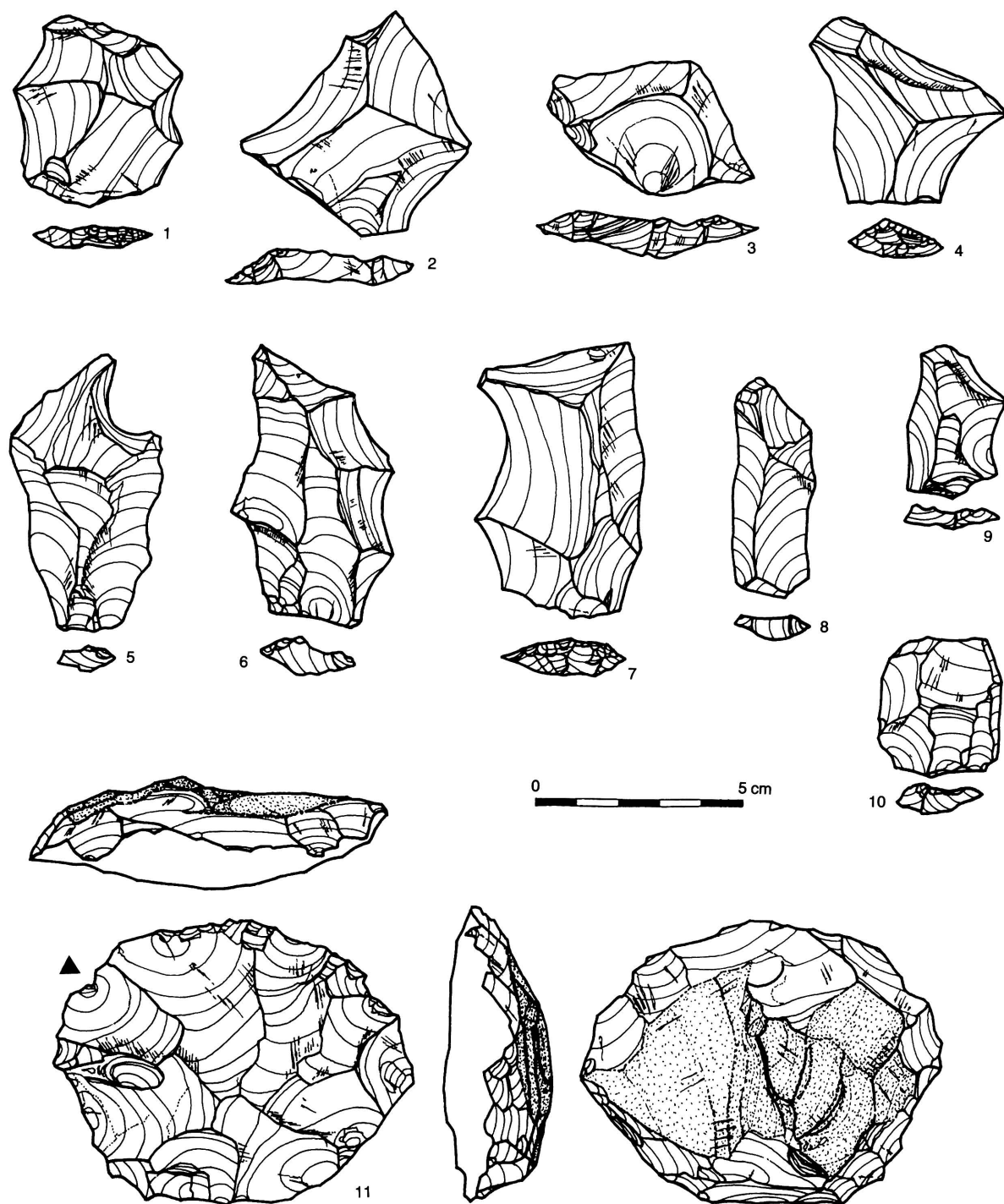


図7 “円盤形”石核復元剥離による剥片と残核

1, 5～7, 9～10 偶発ルヴァロワ剥片 2～4 典型的スード・ルヴァロワ・ポイント 8 偶発ルヴァロワ石刃 11 残核 (1～10の剥片はすべて石核側面・表面調整終了後に剥離された“真正”剥片である)

石核表面調整剥片は平坦打面 (44点) か山形打面 (26点) を持ち, “真正”剥片は, 山形打面 (65点), 或いは平坦打面 (39点) を持っている。

最も頻繁に見られた石核表面調整剥片の背面上剥離痕は交差型 (49点) である。単一剥離痕によるものがそれに次ぐ (17点)。“真正”剥片の背面上剥離痕は圧倒的に交差型 (115点) で, 求心型は僅かである (8点)。“真

正” 剥片の剥離過程で生じた偶発ルヴァロワ剥片と石刃の背面上剥離痕は交差型（44点）が多く、求心型のものは僅かである（7点）。

石核表面調整剥片の背面上剥離痕数の平均は2.8（分析資料：83点），“真正” 剥片に関する平均は4.8（分析資料：125点）である。

以下に挙げる分析結果は，“古典的ルヴァロワ” 剥離と “円盤形” 石核剥離の関係を考察する際に有益な示唆になるとと思われる。

1. 偶発ルヴァロワ剥片類は，“古典的ルヴァロワ” 剥離の石核表面再調整過程（8点：石核表面再調整剥片総数20点のうちの40%）、及び，“円盤形” 石核剥離の “真正” 剥片剥離過程（51点：“真正” 剥片総数126点のうちの40.5%）で最も頻繁に剥離された。
2. “古典的ルヴァロワ” 剥離の6個のルヴァロワ剥片の背面上剥離痕数の平均は13.2である。一方，“古典的ルヴァロワ” の石核表面再調整過程と “円盤形” 石核剥離の “真正” 剥片剥離過程で生じた偶発ルヴァロワ剥片類に関する平均は、それぞれ6.4（分析資料：8点）と5.8（分析資料：50点）である。
3. “古典的ルヴァロワ” 剥離の6個のルヴァロワ剥片の最大長平均は78.3ミリメートル，最大幅平均は61.8ミリメートル，最大厚平均は10ミリメートルである。“古典的ルヴァロワ” 剥離の表面再調整に由来した8個の偶発ルヴァロワ剥片類の最大長平均は54.6ミリメートル，最大幅平均は38.1ミリメートル，最大厚平均は6.6ミリメートルである。そして，“円盤形” 石核剥離の “真正” 剥片剥離過程で生じた偶発ルヴァロワ剥片類の最大長平均は51.5ミリメートル（分析資料：49点），最大幅平均は33.7ミリメートル（分析資料：51点），最大厚平均は5.6ミリメートル（分析資料：51点）である。
4. “円盤形” 石核剥離の剥離物総数に対する意図的剥離の典型的スード・ルヴァロワ・ポイントの出現頻度は4.6%（剥離物総数259点に対する12点）である。これは “古典的ルヴァロワ” 剥離における典型的スード・ルヴァロワ・ポイントの（図6-6）偶発的出現頻度3.4%（剥離物総数235点に対する8点）と大差なく，決して高い頻度ではない。

上記四項の分析結果を要約すれば，ルヴァロワ様剥片は “古典的ルヴァロワ” 剥離の石核表面再調整過程，或いは “円盤形” 石核剥離の “真正” 剥片剥離過程に於いて意図せず，また，容易に剥離されるが，それらは，意図的剥離のルヴァロワ剥片よりも小形で，より少ない背面上剥離痕を持つということになるだろう。

このような意図的ルヴァロワ剥片と偶発ルヴァロワ剥片類の差異は極めて微妙なものである。遺跡立地での素材原石の質や量というような外的条件に影響されることも少なくないと思われる。“古典的ルヴァロワ” 剥離と “円盤形” 石核剥離のあいだには，通常考えられている程大きな差異は存在しなかったとすることができるだろう。

### “古典的ルヴァロワ” 石核と “円盤形” 石核の類似

筆者が以前 “古典的ルヴァロワ” 石核と “円盤形” 石核のあいだに明確な一線を引くことの困難性について指摘したことは既に述べたが，この指摘の中で筆者は両石核を包含する石核分類を仮説的に提起した〔大沼 1991：表2〕（表1）。

この石核分類は，石核の形態や剥離方向ではなく，目的剥片の剥離回数に基づいている。石核は，まず，目的

剥片の単一剥離石核と複数剥離石核の二グループに大別され、次いで、各グループは、目的剥片の形状を予め準備するための石核調整を施されていないものと施されているものの二者に分類される。すべての石核は剥離回数で範疇化されているので、様々な形態と剥離方向に関連する。

この石核分類では、“円盤形”石核は片面剥離と両面剥離の二種に分けられている。そして、片面剥離“円盤形”石核は、単一剥離“古典的ルヴァロワ”石核、複数剥離“古典的ルヴァロワ”石核、未剥離の“古典的ルヴァロワ”石核、スード・ルヴァロワ・ポイント石核の四者からなり、一方、両面剥離“円盤形”石核はスード・ルヴァロワ・ポイントの剥離を目論まれたものとされている。ここでいうスード・ルヴァロワ・ポイントには、典型例だけでなく、ルヴァロワ・ポイント状の外形を持たない非典型例としての“斜軸剥片”〔Bordes 1961：Plate 12-10, Plate 13-2〕も含まれている。

表 1 剥離回数による石核分類〔大沼 1991：表 2〕

単一剥離石核：	
1. 石核調整を全く施されない単一剥片用石核	
2. 剥離を導く稜線と打面とを準備する石核調整を経て単一の前定剥片が剥離される石核：	
ルヴァロワ剥片石核、ルヴァロワ石刃（縦長剥片）石核、ルヴァロワ・ポイント石核	
複数剥離石核：	
1. 複数の剥片を剥離する際に剥離を導く稜線が準備されず既存の剥離面が打面として利用される石核	
2. 剥離を導く稜線と打面とを準備する石核調整を経て複数の前定剥片が剥離される石核：	
ルヴァロワ剥片石核、ルヴァロワ石刃石核、ルヴァロワ・ポイント石核、	
スード・ルヴァロワ・ポイント石核（片面剥離円盤形石核、両面剥離円盤形石核）、	
後期旧石器の石刃石核	
“古典的”ルヴァロワ石核の呈し得る形態：	
“古典的”ルヴァロワ石核	石核の形態
Boëda〔1988a〕の単一剥離（剥片）石核	亀甲形、片面剥離円盤形
Boëda〔1988a〕の求心方向複数剥離石核	亀甲形、片面剥離円盤形
目的剥片未剥離の“古典的”ルヴァロワ石核	片面剥離円盤形

更に、同分類に於いて“古典的ルヴァロワ”石核は片面剥離とされている。ただ、石核の片面剥離、或いは両面剥離という事柄については、遺跡立地での石材調達の容易性や困難性〔Bordes 1953：232-233〕というように、様々な外的条件が密接に絡んでいたと思われる。この視点からの検討が今後必要とされるだろう。

ところで、今回新たに追加した“円盤形”石核復元剥離物の分析結果は、上記石核分類と何ら矛盾するものではない。むしろ、その妥当性を再確認させるものである。特に、“古典的ルヴァロワ”の石核表面再調整、或いは複数剥離の“古典的ルヴァロワ”を“円盤形”石核剥離から区別することの難しさを再確認させるものである。

この複数剥離“古典的ルヴァロワ”に関しては、Bordes も、一部の言及〔1961：17, Plate 3-2〕を除いて、それがかつて存在した可能性を述べていない。それ故、Bordes は“古典的ルヴァロワ”を単一剥離と見做していたと思われる。

しかしながら、複数剥離の“古典的ルヴァロワ”が存在したことは石器素材の効率的利用という観点からも自明のことである。

一方、“円盤形”石核は、通常、典型的スード・ルヴァロワ・ポイントと不可分、一体のものとして考えられている〔Bordes 1961：22-23, Fig. 3-7〕。

“円盤形” 石核が実際に典型的スード・ルヴァロワ・ポイントだけの剥離を意図した [Bordes 1961: 16, 72-73] ものであったとすれば、その剥離概念は“古典的ルヴァロワ” のそれと異なるものであったろう。

ただ、筆者は、典型的スード・ルヴァロワ・ポイントだけを剥離するための素材としての“円盤形” 石核の考古学的実物資料を未だ知らない。このこと、更には、復元製作にかかわるこれまで述べてきた研究成果を重視すれば、“円盤形” 石核は、典型的スード・ルヴァロワ・ポイントとの不可分性で捉えられるべきではなく、むしろ、円盤状の形態及び剥片の求心方向連続剥離という点で捉えられるべきだろう。

また、これら二種石核の最終放棄段階の剥離作業面様相は、剥離開始時点で計画された様相をそのまま示しているとは限らない。例を挙げれば、“古典的ルヴァロワ” 石核から剥がされた“古典的ルヴァロワ” 剥片が予定したよりも小形に剥離された場合、石核の最終剥離作業面は複数の同様剥離痕から成り、ルヴァロワ剥離による一枚の大形剥離痕を持つ当初の予定様相とは異なることになる。

この場合、石器時代人が我々現代石器分析者の所謂“古典的ルヴァロワ” として作業した石核は、所謂“円盤形” 石核と決めつけられることになるだろう。

以上の諸点は、“古典的ルヴァロワ” 剥離と“円盤形” 石核剥離の差異が極めて微妙であって、両者の区別が必ずしも容易ではないということを示している。

相互に類似するこれら剥離技法の出現契機に関しては、先に引用した Dortch と Bordes [1977] のオーストラリア西部のルヴァロワ技法関連民族誌が極めて示唆的である。即ち、“古典的ルヴァロワ” 剥離、或いは“円盤形” 石核剥離は、その出現時に於いては非常に特殊な技法ではなく、原皮が除去され且つ辺縁全周が鋭利である剥片を得るための最も自然且つ最適な石核調整であったと思われる。そして、この自然性と最適性こそが、剥片に対する同様な需要や好みが存在したところで、時と所を問わず、これらの技法を出現させたと考えられるのである。

## おわりに

ここで、具体的考古資料を示し、それらに関する私見を述べることにする。資料は、西アジア地方、或いは日本列島で発掘・採集されたものである。

シリア、ヤブルド岩陰 I 遺跡出土資料 [Rust 1950] (図 8)

5 層の所謂“マイクロ・ムステリアン” 層から出土した剥片と石核である。素材はフリント質岩石である。先述したように、筆者の“円盤形” 石核復元剥離に於いては、意図せず且つ極めて頻繁に、小形のルヴァロワ様剥片が剥離されている。このことは、ここに図示した資料を典型とする“マイクロ・ムステリアン”、或いは、小形ルヴァロワ剥離物で特徴づけられる“ルヴァロワ・ムステリアン” の剥片類が、複数剥離“古典的ルヴァロワ” 石核からだけでなく、“円盤形” 石核からも剥がされていたことを示唆するものである。

シリア、ドゥアラ洞穴遺跡出土資料 [Akazawa 1974] (図 9)

“ルヴァロワ・ムステリアン” 層出土の石核である。赤沢威によるルヴァロワ剥片石核 (図 9-4)、ルヴァロワ石刃石核 (図 9-6)、“円盤形” 石核 (図 9-1~3, -5) で、フリント質岩石を素材にしている。図から判断する限り、ルヴァロワ石核と“円盤形” 石核は断面形の差異で区別されているようである。ただ、先述したように、これら両石核の断面形には、しばしば、中間乃至移行形態がある。それ故、断面形による両石核の区別は極めて至難な業と思われる。



イラク、タール・ジャマル遺跡採集資料〔Ohnuma 1976〕(図10)

“ルヴァロワ・ムステリアン”に関連する石核である。素材はフリント質岩石である。筆者は以前これらの資料を“円盤形”石核と記述した。しかしながら、これらの資料を最終剥離の小さい(図10-2～-3)、或いは未剥離の(図10-1, -4)“古典的ルヴァロワ”石核と捉えることも可能である。これらも、また、ルヴァロワ、“円盤形”両石核を区別することの難しさを示す格好の資料である。

栃木県星野遺跡採集資料〔芹沢 1966〕(図11)

ともに芹沢長介が亀の子型(ルヴァロワ型)石核として紹介した資料である。素材はともに珪岩である。図11-1資料に於いては、両面各一枚ずつの主要剥片が剥離されている。図11-2資料は、尖頭剥片を剥離された、また、典型的調整打面を持っている、石核である。その形態に拠る限り、これら二資料はルヴァロワ石核と呼ぶべきものである。

山形県下採集資料〔渋谷・阿部 1990; Abe 1976〕(図12)

山形県の真木遺跡(図12-1～-3)、及び、高瀬山遺跡(図12-4)で採集された資料である。真木遺跡資料は頁岩製、高瀬山遺跡資料は流紋岩製である。真木遺跡の石核(図12-1)は、渋谷孝雄と阿部惣一郎によってルヴァロワ型石核類似“円盤形”石核と記述されている。両氏によれば、この石核の一面に見られるネガティブな大形剥離痕は周囲の小剥離痕で切られている。両氏は、また、この石核が、そこからルヴァロワ剥片を剥離するためには、薄すぎると述べている。薄すぎると否かということ以上に、これは残核であり、そこに見られるネガティブな大形剥離痕が同遺跡に由来する求心剥離痕を持つ剥片(図12-2～-3)に類似した剥片の剥離によって残されたと考えることも可能である。一方、高瀬山遺跡の石核は阿部祥人がルヴァロワ様石核と記述した資料である。この石核をその形態から“古典的ルヴァロワ”石核と呼ぶことに何ら異論はないだろう。

宮城県下採取資料〔鈴木・藤村 1983〕(図13)

“日本の前期旧石器時代”に位置づけられる資料である。朴木欠C遺跡(図13-1)、安沢A遺跡(図13-2, -6～-7)、馬場壇A遺跡(図13-3, -5)、及び、馬場壇C遺跡(図13-4)で採取された資料である。図13-1, -5(チャート)及び-3(珪質凝灰岩)の三資料以外は珪質頁岩を素材にしている。安沢A遺跡の石核(図13-7)は、鈴木博子と藤村新一が“円盤形”石核と記述した資料である。その形から観て、これが典型的“円盤形”石核であることに何の異論もないだろう。ただ、その一面に見られる主要剥離痕の大きさに注目するなら、この石核をやや小さめな剥離痕を持つ複数剥離“古典的ルヴァロワ”石核とすることも可能である。図13-5は“円盤形”石核である。図13-1と-2は、ともに、典型的スード・ルヴァロワ・ポイントと呼ぶことのできる資料である。

以上紹介した考古資料が物語るように、我が国(特に東北地方)に於いても“古典的ルヴァロワ”或いは“円盤形”様の石核が存在した。このことに関して、筆者はそれを大陸からの人間渡来という観点にこだわらず、日本列島での技術的展開という観点でも捉えている。

先述したオーストラリア西部のルヴァロワ技法の民族誌〔Dortch and Bordes 1977〕が示唆するように、“古典的ルヴァロワ”或いは“円盤形”石核剥離は何ら特殊な技法ではなく、鋭利な辺縁を有する剥片を得るための極めて自然な石核調整であったと思われる。それ故、この民族誌報告例同様な剥片嗜好の存在したいたるところで出現したと思われるのである。このような事情は日本列島の石器時代に於いても存在したと思われる。ただ、我が国の石器時代に関しては、これらの技法がその出現以後どの程度流行したのか、或いは、後に確固たる技術伝



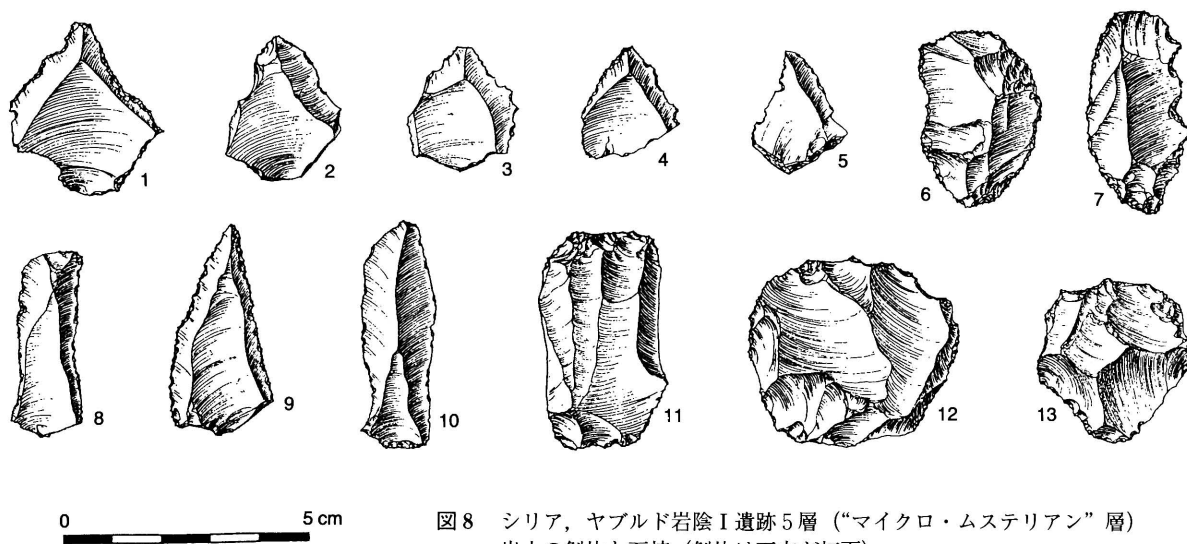


図8 シリア，ヤブルド岩陰Ⅰ遺跡5層（“マイクロ・ムステリアン”層）出土の剥片と石核（剥片は下方が打面）

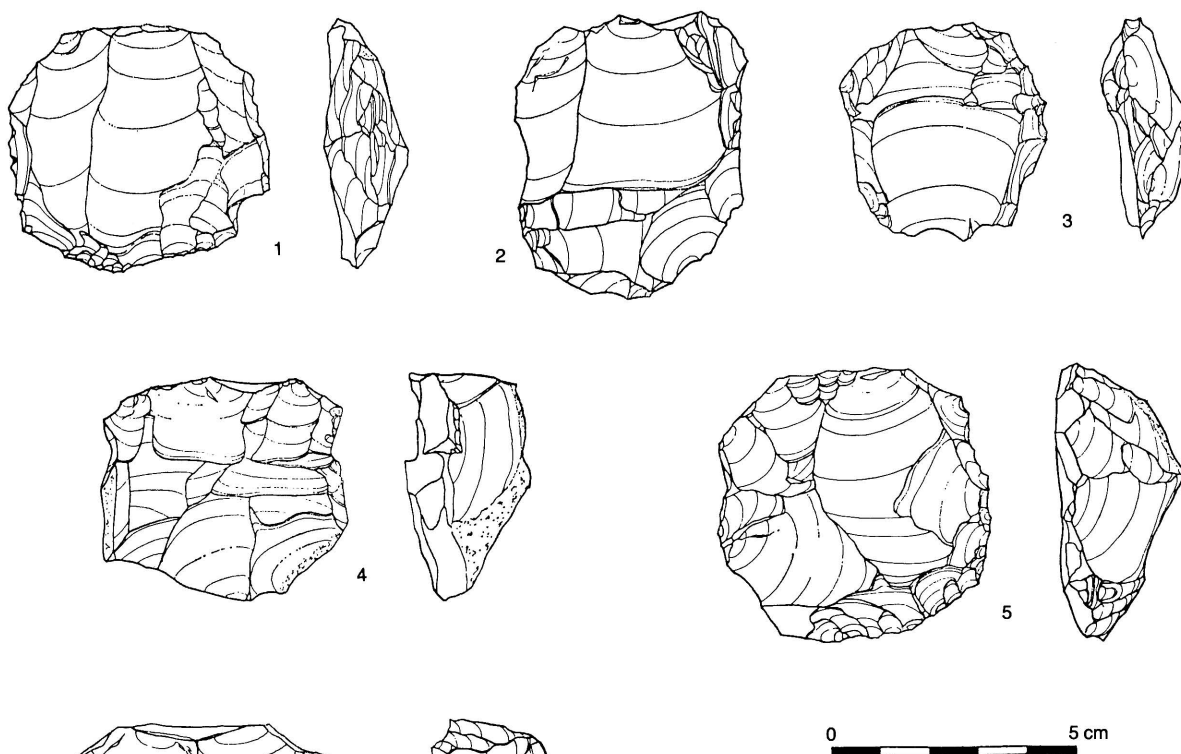


図9 シリア，ドゥアラ洞穴遺跡出土の石核

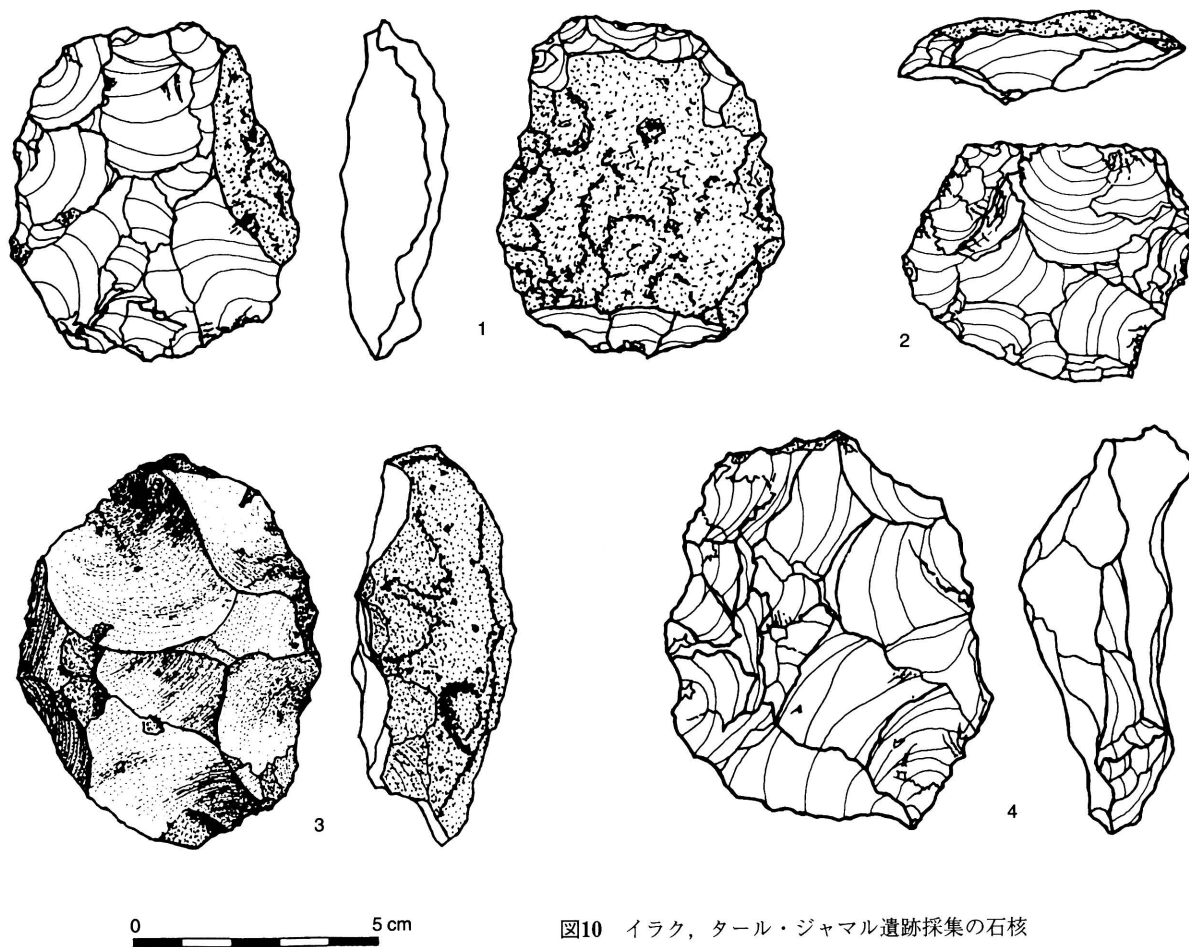


図10 イラク、タール・ジャマル遺跡採集の石核

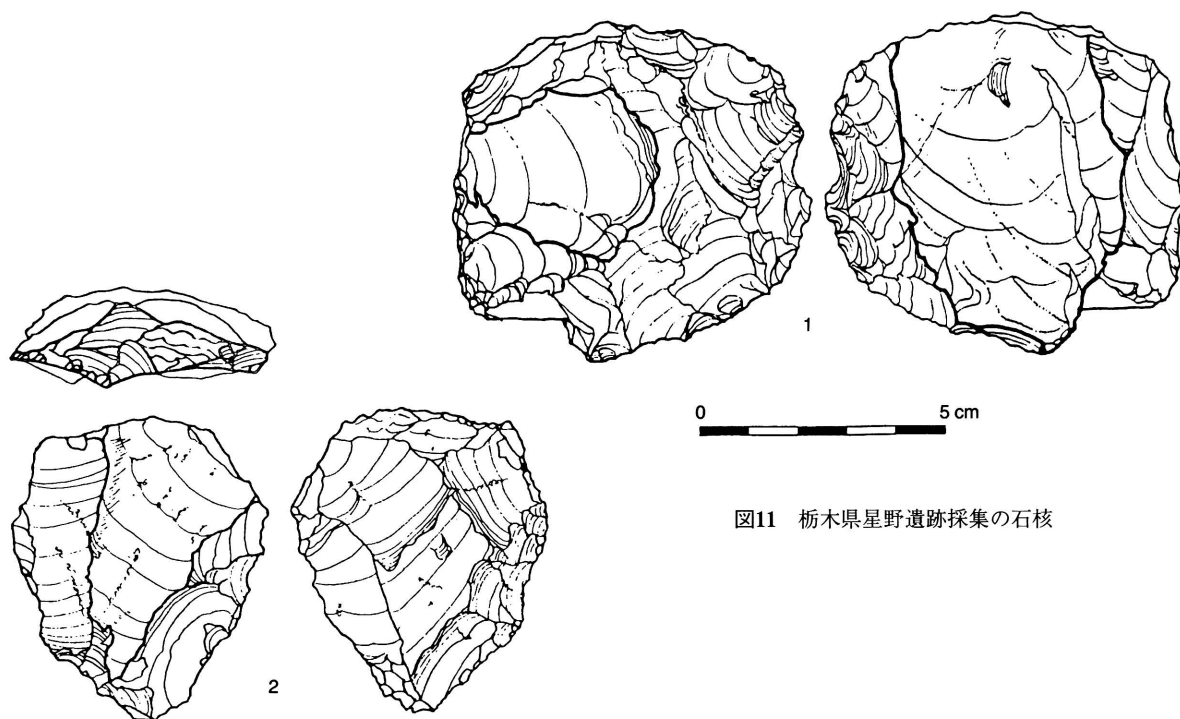


図11 栃木県星野遺跡採集の石核

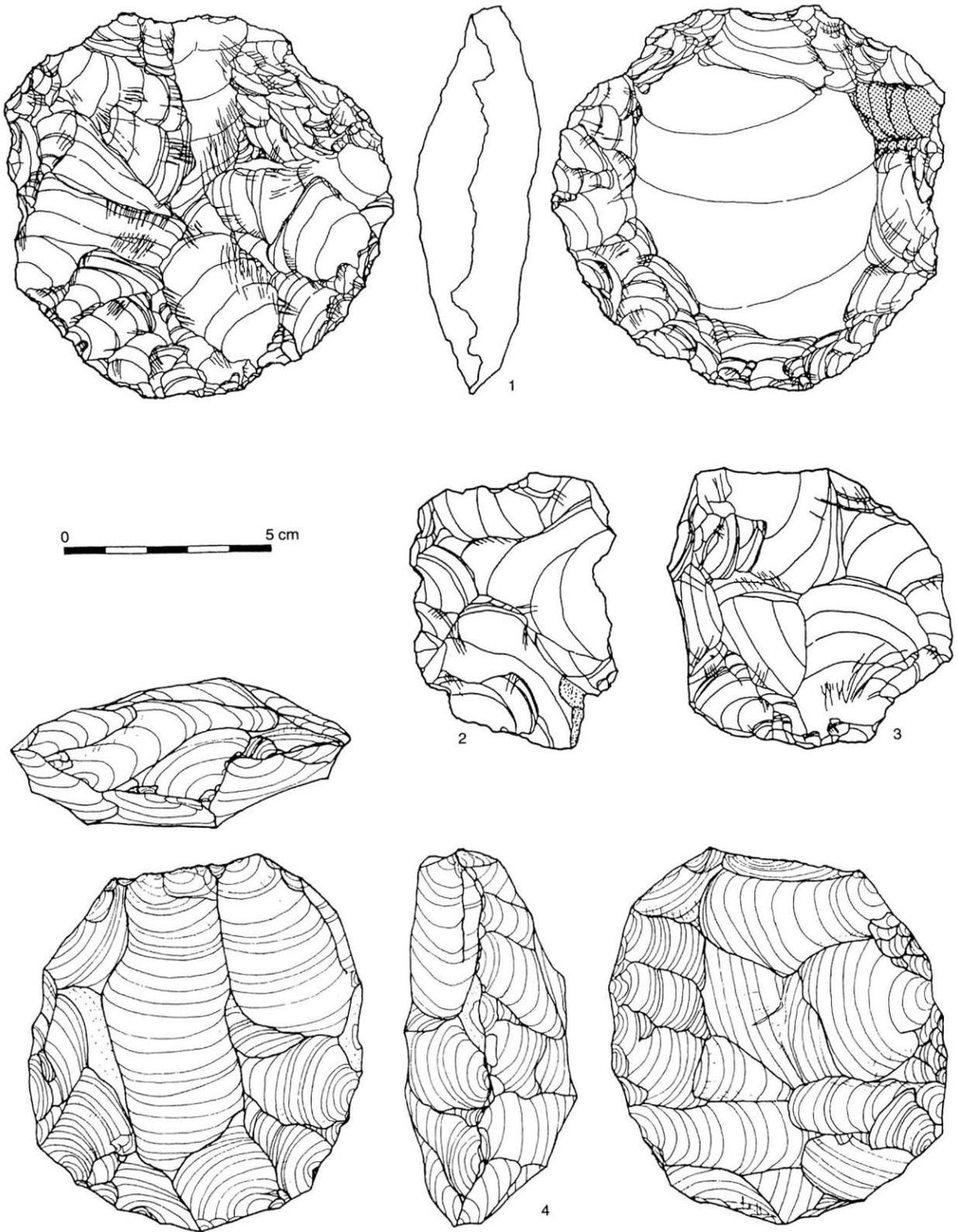


図12 山形県下採集の石核と剥片  
1～3 真木遺跡 4 高瀬山遺跡（剥片は下方が打面）

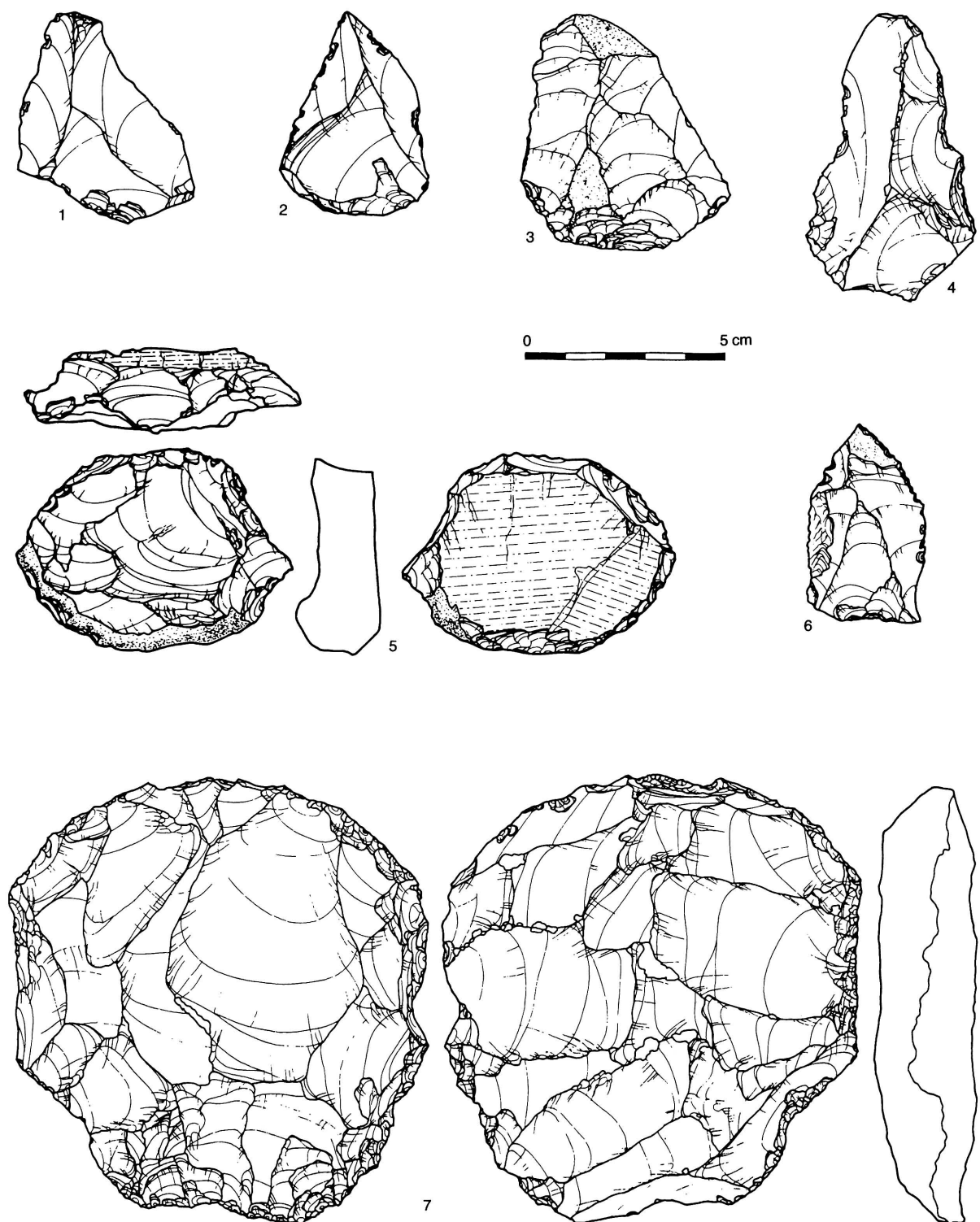


図13 宮城県下採取の剥片と石核

1 朴木欠C遺跡 2, 6~7 安沢A遺跡 3, 5 馬場壇A遺跡 4 馬場壇C遺跡 (剥片は下方が打面)

続になったのかどうかという問題は未だ本格的に検討されてはいないようである。

これまで述べてきた“古典的ルヴァロワ”剥離と“円盤形”石核剥離の技術的類似を考慮してもなお、両者のあいだに意義ある差異を認めることが可能である。即ち、前者に由来する“古典的ルヴァロワ”剥片には概して

欠如し、後者に由来する“斜軸剥片”には顕著に認められる二次加工の有無である〔西部 1978〕。

この剥片上二次加工の有無状況は，“古典的ルヴァロワ”剥離と“円盤形”石核剥離のあいだに間接的に設けられ得る差異である。剥片上二次加工に関する体系的検討こそが、今後、両剥離技法の研究で不可欠且つ重要な作業になると思われる。

機能的視点に立脚した石核分類が望まれる。即ち、石核の形態や剥離方式にこだわらない、また、剥片の使用形態を考慮する石核分類が望まれるのである。二次加工を施されずそのまま道具として使用されるルヴァロワ剥片を生産するための“古典的ルヴァロワ”石核、そして、二次加工を施されてから使用される加工道具素材剥片を生産するためのスード・ルヴァロワ（・ポイント）石核としての“円盤形”石核という分類である。

## 謝 辞

本稿は、平成5年5月（11日～15日）に米国・フィラデルフィア市・ペンシルヴァニア大学・大学博物館で開催された国際研究会議：The Definition and Interpretation of Levallois Technology（ペンシルヴァニア、ハーヴァード両大学の主催）における研究発表：Analysis of Débitage Pieces from Experimentally Reduced “Classical Levallois” and “Discoidal” Cores を加筆修正したものである。同会議への参加と発表に際してペンシルヴァニア大学人類学科の Harold L. Dibble 教授、並びに、ハーヴァード大学人類学科の Ofer Bar-Yosef 教授に絶大な便宜と有益な教示を頂いた。また、日本国文部省には同会議参加にかかわる助成（平成5年度文部省国際研究集会派遣研究員）を賜った。以上、記して厚く御礼申し上げます。

## 文 献

Abe, Y.

- 1976 Levallois-like Core from Yamagata Prefecture, Japan, *The Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 84 (3), pp. 246-251.

Akazawa, T.

- 1974 Palaeolithic Assemblages from the Douara Cave Site, *The Palaeolithic Site at Douara Cave in Syria, Part 2*, edited by H. Suzuki and F. Takai, Bulletin No. 6 of the University Museum, the University of Tokyo, pp. 1-167.

Boëda, E.

- 1988a Le Concept Levallois et Evaluation de son Champ d'Application, *L'Homme de Néandertal, Vol. 4, La Technique*, Liège, pp. 13-26.  
 1988b Le Concept Laminaire: Rupture et Filiation avec le Concept Levallois, *L'Homme de Néandertal, Vol. 8, La Mutation*, Liège, pp. 41-59.  
 1991 Approche de la Variabilité des Systèmes de Production lithique des Industries du Paléolithique inférieur et moyen: Chronique d'une Variabilité attendue, *Techniques et Culture*, 17-18, pp. 37-79.

Bordes, F.

- 1947 Étude comparative des différentes techniques de taille du silex et des roches dures, *L'Anthropologie*, 51, pp. 1-29.  
 1953 Levalloisien et Moustérien, *B.S.P.F.*, 50 (4), pp. 226-235.  
 1961 *Typologie du Paléolithique ancien et moyen*, Publications de L'Institut de Préhistoire de L'Université de Bordeaux, Mémoire No. 1, Bordeaux.  
 1980 Le débitage Levallois et ses variantes, *B.S.P.F.*, 77 (2), pp. 45-49.

Bordes, F. and D. Crabtree

- 1969 The Corbiac Blade Technique and Other Experiments, *Tebiya*, 12 (2), pp. 1-21.

Crew, H.L.

- 1975 An Evaluation of the Relationship between the Mousterian Complexes of the Eastern Mediterranean: A Technological Perspective, *Problems in Prehistory: North Africa and the Levant*, edited by F. Wendorf and A.E. Marks, SMU Press, Dallas, pp. 427-437.

Dortch, C. and F. Bordes

- 1977 Blade and Levallois Technology in Western Australian Prehistory, *Quartär*, 27/28, pp. 1-19.

Jelinek, A.J.

- 1975 A Preliminary Report on Some Lower and Middle Paleolithic Industries from the Tabun Cave, Mount Carmel (Israel), *Problems in Prehistory: North Africa and the Levant*, edited by F. Wendorf and A.E. Marks, SMU Press, Dallas, pp. 297-315.

Marks, A.E.

- 1976 Glossary, *Prehistory and Paleoenvironments in the Central Negev, Israel, Vol. I: The Avdat/Aqev Area, Part 1*, edited by A.E. Marks, SMU Press, Dallas, pp. 371-383.

Munday, F.C.

- 1976 Intersite Variability in the Mousterian of the Central Negev, *Prehistory and Paleoenvironments in the Central Negev, Israel, Vol. I: The Avdat/Aqev Area, Part 1*, edited by A.E. Marks, SMU Press, Dallas, pp. 113-140.

西部良治

- 1978 日本におけるルバロワ型類似石核についての私論, 『小林知生教授退職記念考古学論文集』, 南山大学小林知生教授退職記念会編, 南山大学考古学研究室, 187-196頁。

Ohnuma, K.

- 1976 Lithic Artifacts from Tar Jamal and Hafna, *Al-Tar I: Excavations in Iraq, 1971-1974*, edited by H. Fujii, The Institute of Ancient Iraq Culture, Kokushikan University, Tokyo, pp. 303-329.  
1990 An Analysis of the By-products of Experimental Manufacture of Classical Levallois Flakes, *al-Rāfidān*, XI, pp. 113-142.

大沼克彦

- 1991 ルヴァロワ技法の再考察: “古典的” ルヴァロワ剥離と円盤形石核剥離, 『ラーフィダーン』, XII, 57-69頁。

Rust, A.

- 1950 *Die Höhlenfunde von Jabrud (Syrien)*, Karl Wachholtz Verlag, Neumünster.

芹沢長介

- 1966 星野遺跡出土の旧石器, 『星野遺跡—栃木市星野遺跡第1次発掘調査報告—』, 芹沢長介編, ニュー・サイエンス社, 5-27頁。

渋谷孝雄・阿部惣一郎

- 1990 山形県真木遺跡の円盤形石核, 『第3回東北日本の旧石器文化を語る会・予稿集』, 加藤 稔編, 山形県立博物館, 7-9頁。

鈴木博子・藤村新一

- 1983 7. 周辺の関連遺跡出土の石器, 『宮城県岩出山町座散乱木遺跡発掘調査報告書 III』, 石器文化談話会編, 38-71頁。

Tixier, J.

- 1963 *Typologie de L'Épipaléolithique du Maghreb*, Arts et Métiers Graphiques, Paris.

Wilmsen, E.N.

- 1968 Lithic Analysis in Paleoanthropology, *Science*, 161, pp. 982-987.

## 石器図の出典

図 8-1. Rust [1950 : Fig. 61-7].

- 2. Rust [1950 : Fig. 61-26].
- 3. Rust [1950 : Fig. 61-23].
- 4. Rust [1950 : Fig. 61-30].
- 5. Rust [1950 : Fig. 61-35].
- 6. Rust [1950 : Fig. 62-4].
- 7. Rust [1950 : Fig. 62-7].
- 8. Rust [1950 : Fig. 63-24].
- 9. Rust [1950 : Fig. 61-10].
- 10. Rust [1950 : Fig. 63-20].
- 11. Rust [1950 : Fig. 63-2].
- 12. Rust [1950 : Fig. 63-3].
- 13. Rust [1950 : Fig. 63-5].

図 9-1. Akazawa [1974 : Fig. X-14-3].

- 2. Akazawa [1974 : Fig. X-13-6].
- 3. Akazawa [1974 : Fig. X-27-3].
- 4. Akazawa [1974 : Fig. X-27-2].
- 5. Akazawa [1974 : Fig. X-15-3].
- 6. Akazawa [1974 : Fig. X-13-4].

図10-1. Ohnuma [1976 : Fig. V-4-7].

- 2. Ohnuma [1976 : Fig. V-3-6].
- 3. Ohnuma [1976 : Fig. V-9-2].
- 4. Ohnuma [1976 : Fig. V-7-7].

図11-1. 芹沢 [1966 : 第7図-21].

- 2. 芹沢 [1966 : 第7図-20].

図12-1. 渋谷・阿部 [1990 : 第4図-1].

- 2. 渋谷・阿部 [1990 : 第4図-3].
- 3. 渋谷・阿部 [1990 : 第4図-4].
- 4. Abe [1976 : Fig. 1].

図13-1. 鈴木・藤村 [1983 : 図35-83].

- 2. 鈴木・藤村 [1983 : 図31-64].
- 3. 鈴木・藤村 [1983 : 図42-109].
- 4. 鈴木・藤村 [1983 : 図27-37].
- 5. 鈴木・藤村 [1983 : 図42-111].
- 6. 鈴木・藤村 [1983 : 図31-63].
- 7. 鈴木・藤村 [1983 : 図33-72].